

ICTを活用した古典授業の開発（一）

— 三大和歌集（中三） —

坂 東 智 子

一 はじめに

本研究は、平成二四年一月にスタートした筆者と山口大学教育学部附属光中学校の先生方との共同研究の一部である⁽¹⁾。

最初に、本研究の基本的な考え方と背景を記す。秋田喜代美（二〇一〇）は、Barnes（一九七六）の「教室における知識・コミュニケーション・学習の関連性」を手掛かりに、教室のコミュニケーション様式を大きく二つに分け、次のように記述している⁽²⁾。

伝えることが優位になれば、教師の仕事は生徒の答えの評価者となり、生徒はきちんとした答え（最終稿）を言うことを重視する。この場合には、学校のみで通用する学校知という文脈では適切に使用されるが、生活へのつながりやより高次の探索は生じにくい。一方、相互に生徒の考え方を解釈しあつて自分たちで知識を構築していく過程と授業を捉えるならば、教師はこの意味の交渉を組織し、生徒が協働しあう中で応答する役割を担うことになる。この場合には、生徒は仲

間の考えを聞き合いながら自分たちの考えを作り出していくために、たどたどしく探索的な言葉を使用することになる。それは日常生活と関連したり、教科内容をより高次に探究することにもつながることがある。

上記の二様式は実際には二項対立ではないが、本研究が歌合的手法を取り入れ、ICT活用で作りに出そうとしたのは、特に後者「相互に生徒の考え方を解釈しあつて自分たちで知識を構築していく過程」である。三大和歌集の歌風の変化を、教師から学習者への知識の伝達としてではなく、学習者が協働で知識を構築していく過程で感じ取ってほしいというのが本授業のねらいである。ICTは、班での協働（探索的）学習過程と全体交流の場で活用した。Fuson, Katchman&Bransford（二〇〇五）は、子どもを思考を促すという視点から教室談話を四段階に整理している⁽³⁾。

（第一）教師が発問し、一人の生徒が答える。

（第二）指名した生徒の答えの背景にある思考や解き方を教師が吟味するようなT-C談話。

(第三) 生徒たちが発言を通して、できるだけ多様な考え方を相互に語り合い、教師はそれらを整理し、生徒が吟味できるように組織化していく談話。

(第四) 生徒が自分の考えを正当化したり、相互に質問したり援助することによって、授業が進められていく談話。

本研究が作り出したのは、主に第三の教室談話である。この談話は、「相互作用のある対話(トランザクティブディスカッション・transactive discussion)⁽⁴⁾」と換言できる。いわば、「相手の考え方や推論の仕方に働きかけ、相手の思考を深めたりするような相互作用⁽⁵⁾」のある教室談話である。

実際の教室では、学習者同士が多様な考え方を相互に語り合う水平的な相互作用と教師が介在する垂直的な相互作用とが交錯して授業が進行する。また水平的な相互作用にも諸相がある。発言や記述によって外在化され教師や他の学習者に見えやすいものもあれば、全体学習の中で教師と他の学習者との問答を聞いている学習者の個人内部で生じてはいても外在化されず見えにくいものもある。この学習者同士の水平的相互作用を一部ではあっても何らかの形で外在化させ、教師にも他の学習者にも見えやすいものにする方法の一つとして本授業では ICT を活用し、まとめのレポートを書くという課題設定を行った。協働学習における相互作用の過程や成果を可能な限り可視化すること。学習者がより多様な解釈、考え方と出会うための全体発表での ICT 活用。さらには、教師がそれら多様な解釈を整理して、学習者が解釈を吟味、比較

したり再構築したりする過程を作り出すこと。これらに ICT 活用の必然性があるというのが、本研究の仮説である。

本研究の背景としては、平成二六年度附属光中学校の研究主題「新たな価値を創造する子どもを育てる」思考を活性化する学びのフィールド⁽⁶⁾」がある。全教科で思考を活性化させるかかわり合いのあり方に注目した研究が行われていた。質の高いかかわり合いを生み出すためには、(1)小集団活動を効果的に組み込む、(2)多様性に注目したかかわり合いを仕組む、(3)個の学びが充実している、の三条件が必要だとされた。本研究では、(1)(2)のために ICT を活用し、(3)個の学びを充実させるために、まとめのレポートを書く課題を設定した。

二 研究の目的と方法

本稿では、平成二六年一二月に安部教諭が実践した歌合的手法を用いた三大和歌集のまとめのレポートを主な分析対象として、ICT を活用した協働学習の過程を、トランザクティブディスカッションの対話分析手法により検討し、学習者が協働で知識を構築していく過程における ICT 活用の有効性と課題を明らかにする。具体的には、後掲(表 1)⁽⁷⁾の操作的トランザクシヨンの五つのカテゴリーを個々のレポートの記述分析に用いる。レポートの記述は、実際の対話とは異なるが、本授業全体の協働学習のプロセスを捉えるためには、個々の対話分析よりもレポートの記述分

析が適当だと判断した。

表1 トランザクティブディスカッションの類型

カテゴリー		分類基準
表象的 トラン ザクシ ョン	1-a 課題の提示	話し合いのテーマや論点を提示する。
	1-b フィードバック の要請	提示された課題や発話内容に対して、コメントを求める。
	1-c 正当化の要請	主張内容に対して、正当化する理由を求める。
	1-d 主張	自分の意見や解釈を提示する。
	1-e 言い換え	自己の主張や他者の主張と同じ内容を繰り返して述べる。
操作的 トラン ザクシ ョン	2-a 拡張	自己の主張や他者の主張に、別の内容をつけ加えて述べる。
	2-b 矛盾	他者の主張の矛盾点を根拠を明らかにして述べる。
	2-c 比較的批判	自己の主張が他者の示した主張と相いれない理由を述べながら、反論する。
	2-d 精緻化	自己の主張や他者の主張に、新たな根拠をつけ加えて説明し直す。
	2-e 統合	自己の主張や他者の主張を理解し、共通基盤の視点から説明し直す。

三 学習の実際（授業者 安部要治教諭）

1 単元の目標

音読や群読を通して、五七調、七五調のリズムを味わうことができる。また、歌合の手法を用い、共通のモチーフの和歌を比較する活動を通して、和歌に込められた心情や情景を理解し、昔の人のものの見方や感じ方をとらえ、それぞれの和歌の良さや特徴を見出すことができる。

2 単元構成（総時間数 九時間）

（一次）一時間。古今和歌集「仮名序」を読む。古人の和歌への思いをさぐる。

（二次）二時間。万葉集「天地の（長歌）」「田子の浦ゆ（反歌）」の意味を考え、群読台本を作成して群読する。

（三次）五時間。万葉集・古今和歌集・新古今和歌集の鑑賞。同じモチーフの和歌を比較する活動を通して、和歌の良さを探る。（四次）一時間。レポート作成。単元を振り返り、和歌集の特徴を把握させ、和歌の伝統をどのように繋いでいくかを考える。

三次で取り上げた和歌を以下に記す。

① 「春の訪れ」・石ばしる垂水の上のさわらびの萌えいづる春になりにけるかも（万葉 志貴皇子）・袖ひちて結びし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ（古今 紀貫之）

② 「秋」・秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる（古今 藤原敏行）・見たせば花も紅葉もなかりけり浦の苦屋の秋の夕暮れ（新古今 藤原定家）

③ 「夢」・みを尽くし心尽くして思へかもここにももとな夢にし

見ゆる（万葉 読み人しらず）・思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを（古今 小野小町）

- ④ 「別れ」・防人に行くはたが背と問ふ人を見るが羨もしさ物思ひもせず（万葉 防人の妻）・君往なば月待つとてもながめやらむ東の方の夕暮れの空（新古今 西行）

3 ICTを使用した学習の様子（安部教諭の考察から）

同じモチーフで違う和歌集から選んだ二首の和歌を各班が担当しプレゼンテーションを行う。他の班はそれを聞いて、モチーフにふさわしいと思う和歌に投票する歌合的手法を用いた。生徒は大変楽しく、意欲的に学習に取り組んだ。「競う」という要素と「新たな機器を使う」ことで、興味がわき意欲をかき立てられたのかも知れない。ほとんどの班は電子黒板を使用した。実物投影機を併用した班もあった。パワーポイントで作成した資料を電子黒板で説明したり寸劇など意欲的な取組に驚くばかりであった。

4 生徒のプレゼンテーション後の教師のはたらきかけ

生徒のプレゼンテーションを受けて、それぞれの和歌集の特徴を見いだせるようなさらなる思考へと促す発問を行った。モチーフ「春の訪れ」では、「見て創った和歌と想像して創った和歌では、読み手はどのような感じ方になるか」と問いかけた。

5 レポート作成の手引き（第四次）

- (1) はじめに ・和歌集や和歌について、学習前のイメージ
(2) 和歌集の特徴についてわかったこと
・自分が担当した和歌や他の班の発表を聞いて感じたこと、

考えたこと、見出したこと

- ・便覧の三大和歌集の特徴と関連付けて、考えたこと
(3) 和歌の伝統をどのように繋いでいけばよいと思うか
(4) この学習を通して、学んだこと （一部割愛）

四 レポートの分析

1 レポートの字数

表2 まとめのレポート総字数一覧

1	2134	8	1175	15	1006	22	845	29	664
2	1510	9	1149	16	995	23	795	30	500
3	1288	10	1044	17	973	24	791	31	440
4	1246	11	1041	18	960	25	784	32	348
5	1212	12	1033	19	955	26	779		
6	1192	13	1029	20	927	27	771		
7	1181	14	1007	21	850	28	681		

研究授業を実施した三年二組（33名）のレポート総字数を字数の多い順に並べ替えた（表2）。最も字数の多かったのが2134字、最も少ない生徒でも348字であった。未提出者は1名。32名中31名が原稿用紙一枚以上書いている。安部教諭によると、普段あまり国語が得意ではない生徒も、便覧の記述をそのまま写すだけというものはおらず、学習経験をもとに書いている。千字以上は15名であった。提出者全員が、具体的な和歌を挙げて記述し、四段落中最も多くの字数をさいている。これは、三大和歌集の歌風の変化を、教師から学習者への知識の伝達としてではなく、学習者が協働で解釈や知識を構築していく過程で感じ取り、便覧等から得た知識と統合させて、「行為の

知」を獲得した証左の一つだと捉えることができよう。

4 トランザクティブディスカッションの対話分析を用いた検討

表1「操作的トランザクション」の五カテゴリーを、レポート分析に用い、協働学習のプロセスを検討する。いくつかの記述例を挙げる。(下線、カタカナ記号、山括弧は筆者が付記した)

①【比較↓拡張↓統合】

(前略)他の班の「秋」をテーマにした和歌の発表で「秋来ぬ」と「見わたせば」の2つがありました。ア秋についての着目点が違っていた事に注目して学びました。へ比較「秋」についての感じ方が通常、紅葉やいちよう、くりの木、柿の木という単純に目に入る視覚的な秋ではなく、同じ目を感じる秋でも夕暮れというふせいのある表現を秋と感じとれるよう歌われている。イまた、この夕暮れ1つにおいても、枕草子などでは明るい歌としての夕暮れがあったり、今回学んだようなもの悲しく寂しい夕暮れイコール「秋」だったりと同じ言葉を使っている。それにかかる感情が違うのだなと思いました。へ拡張「それから、ウもう1つは聴覚からの秋で風の音や肌寒いという表し方で秋を感じているところで隠れている秋をうまくひき出している所がすばらしいと思いました。」

エ三大和歌集の中の万葉集には「素朴」という意味がありますが「統合」、私たちの班が担当した「みを尽くし」には、作者の思いが率直に表されていることから、まさにこの歌はそれにひびいてきすると思えました。(AYさん)

AYさんが担当したのは夢をモチーフにした万葉集「みを尽くし」歌である。他班の秋の歌二首の着目点の違いに注目したと記している。ロを活用した発表は、音声情報だけでなく、視覚的資料も提示され、ウ二首の着想の相違が強く印象に残った。この場合の「比較」は厳密には「比較的批判」ではないが、万葉集の歌風を再考する際の比較検討材料となっている。イはこれまでの学習経験を思い出しつつ、古典作品の中の秋に関わる様々な表現や感情の違いについての実感を伴った理解が述べられている。その後、便覧から得た万葉集の「素朴」という知識と学習過程を通じた経験的学びの「統合」からエ以降の記述がなされている。

②【比較↓精緻化↓統合】

私たちの担当した和歌「みを尽くし」を調べてみると、反復や掛詞など多くの技法がとり入れられているとともに、「ここ」や「み」などひらがなで表すことで、多くの意味をもつことがわかった。この句は、妻から作者への愛情の深さが表されている。「ここにももとな」のところで特に強く表されていると思った。オ「思いつつ」という同じ恋や夢をテーマとした句を比べてみると、作者の恋への満足感や片思い、両思いならではの感情がすつと心に入ってくるように感じた。へ比較カ私たちが担当した万葉集の和歌や他の班の同じ万葉集の和歌を聞いたとき、作者に共感がすごくてきた。万葉集ならではの素朴さが私をそう感じさせたのではないだろうか。へ精緻化私たちの句では、尽くしているからこそ夢にみてしまうという作者のありの

ままの感情がよく伝わってきた。(中略)だから、**キ**「まこと」は、ありのままや素直さを大切にすることで読み手に伝わるといふことなのではないだろうか。〈統合〉(MAさん)

MAさんの担当は万葉集「みをつくし」歌である。**オ**同じモチーフの古今集「思いつつ」歌と比較することにより、担当歌の特徴がはつきりと感じられた。ICTを活用することで、比較するという思考が促されている。他班の万葉歌にも共感したことを、**カ**「万葉集ならではの素朴さ」という便覧からの知識と結びつけて説明している。学習経験と知識が結びつき「精緻化」が行われた。

③【比較↓精緻化↓統合】

自分たちの班が担当した和歌は、「秋来ぬと」だった。この歌は視覚と聴覚を対比させて、秋の訪れを表現していた。視覚では秋の訪れは見えないけれど、聴覚で秋の訪れを感じているのを表現しているのがとても面白かった。視覚だけでなくいろいろな人間の感覚を使って表現すると、歌をよんでいる人には、印象深く伝わると思った。**ク**他の班の発表では、「見て創作」するのと「想像して創作」のは歌をよんでいる人のとらえ方が変わっていた。言葉をうまく使って表現することによって、歌をよんでいる人の共感を得ることができたり、自分なりのイメージが広がってその歌の世界観を広げて想像したりもできる。〈比較〉**ケ**学んできた歌は、たくさんさんの技法が使われていたが、ある班は、わざと技法を使わずに、一般人らしいストレートな思いが伝わるといふ考えに私はとても納得した。だから、わざ

と技法を使わないのも、一つの技であることも感じることができた。〈精緻化〉(中略)新古今和歌集は、頭の中でくりひろげられた世界で詠んでいて、美しさはあるが、万葉集のように力強さはない。現実には背をむけ、和歌を通じて、美しい世界を追究していることがわかる。(中略)「見わたせば」の歌は、「秋の夕暮れ」という美しい光景を芸術として表現したのだと私は思った。〈統合〉(KMさん)

「秋来ぬと」歌の視覚と聴覚の対比は、プレゼンで図式化して説明された。ICTを活用した全体発表は、歌の特徴や工夫を視覚的にも示すことで実感を伴った理解を促した。**ク**は、学習者同士の水平的な相互作用と、教師が介入する垂直的な相互作用が交錯して生まれた記述だといえよう。プレゼン後の教師のはたらきかけにより具体的な比較から一般化が行われ納得を根拠に「技法を使わないのも一つの技である」という「精緻化」が行われている。

④【比較↓統合】

今回の授業で僕が担当した和歌は、紀貫之の春の訪れを歌った「袖ひちて」でした。**コ**初めにこの歌を読んだ時には、ただ単純に、今は凍っている以前袖をぬらしてすくったみずを、春の風がどかしているという実事をよんだだけのつまらない歌だと思いました。しかし、詳しく調べてみると、この歌には「結びし」と「とく」の対比＋「春」(張る)と「立つ」(裁つ)という掛詞による着物の暗示など多くの技法が含まれているということが分かりました。また、それらの技法を読み解くこと

で、作者の春の訪れを思う心が強調されているということが分かりました。㊦この段階で、和歌に対する深い意味を持たない、つまらないといったイメージはなくなりました。しかし、この歌一つを理解するのにも時間がかかったことから、㊧和歌はわかりにくいというイメージが強くなりました。しかし、他の班の和歌、例えば、同じ春の訪れを歌った歌である「石ばしる」は、はっきりとした情景描写によって、作者の思いを率直に伝えるという、技巧によって作者の思いを伝える㊨僕の班の他と正反対の性質を持っていました。㊩後に、この違いは、それぞれの歌が載っている和歌集の特徴に準ずるものだと知りました。(統合)(後略)(TAさん)

TAさんが担当したのは古今集「袖ひちて」歌である。㊫実事を詠んだだけの「つまらない歌」というのが初発の感想である。その後、班内での協働(探索的)学習過程で、㊬へと変容していく。この変容は、班員が協働で調べ発表資料を作成する過程で生まれたものである。しかし、一首を理解するのに時間がかかったことから、㊭「和歌はわかりにくい」というイメージが強くなりました」と自身の和歌に対する認識をメタ認知している。TAさんの二段落には「しかし」が三度登場する。この三度の「しかし」が学習過程でのTAさんの変容を如実に語っている。班内の活動過程、全体発表を通しての他班の和歌との出会い、ここで再度和歌に対する認識の変容が起こっている。和歌といってもどれも同じではないんだという実感を伴った理解が、㊮「僕の班の歌と正

反対の性質を持っていました」の記述から感じられる。三度の「しかし」は学習過程での心の動きが活写されたものである。この記述からもICTを活用して発表し他班の説明を聞くことは、興味を湧かなくつまらない学習ではなかったことがわかる。興味関心をもって主体的に学習活動に取り組み、その後「和歌集の特徴」といったいわば「学校知」との「統合」が行われたのである。

同じモチーフの二つの和歌を違うグループが担当し、ICTを活用してプレゼンテーションするという歌合的手法と、多様な解釈を教師が整理して比較吟味するというプロセスを経た後に、便覧の知識と関連付けてまとめのレポートを書くという手引きによって、【比較↓拡張↓統合】、【比較↓精緻化↓統合】、【比較↓統合】という、「自分たちで知識を構築していく過程」が生み出された。

五 おわりに

本研究の第一の成果として、学習者が楽しくかつ意欲的に三大和歌集の授業に取り組んだことが挙げられる。歌合の手法で、共通のモチーフの和歌をICTを活用して比較し吟味する活動を通して、ほぼ全員がそれぞれの和歌の良さや特徴を見出し、原稿用紙一枚以上のまとめレポートを書き上げた。三大和歌集の歌風の変化を、教師からの知識伝達としてではなく、学習者が協働で知識を構築していく過程で学びとってほしいという授業のねらいは達成されたといえよう。

「統合」を仮に理解を伴った知識獲得の相とすると、二タイプの「統合」が創出された。メンバー間で共通理解した意味構成と新しい別の意味構成との出会いを契機に既有知識等が結びつく「拡張」を経て学校知（共通基盤）の観点から説明し直すタイプの「統合」と、個人での意味構成がメンバーとの協働の意味構成過程で変容し、さらに別の意味構成との出会いを通じてさらに変容が起こり、新たな根拠を付け加えて説明し直すという「精緻化」を経て、学校知との統合がなされるタイプである。「統合」に至までの多様な意味構成との出会いを生み出すために、比較をより意識的に促す歌合的手法と、協働学習における相互作用の過程や成果を可視化するICT活用は有効に働いたといえる。

課題としては、操作的トランザクションの「矛盾」（他者の主張の矛盾点を根拠を明らかにしながら指摘する）や、「比較的批判」（自己の主張が他者の示した主張と相いれない理由を述べながら反論する）がほとんど見られなかったことが挙げられる。思考を深め、協働で構築した知識を学習者の日常生活と関連させたリ、学習内容のより高次な探索に導くためには、多様な意味構成との出会いを準備するだけでなく、「矛盾」や「比較的批判」といった過程を潜らせることが必要となる。また、どの和歌を組み合わせるかという教材選択の課題も明らかになった。今後は、こういった点も視野に入れた授業開発を行っていきたい。

注

(1) 坂東智子・岩本清子・安部要治「ICT環境を活用した中学

校古典授業の開発」『学部・附属教育実践研究紀要』第13号、平成二六年山口大学教育学部（八九頁～一〇〇頁）、安部要治・岩本清子・沖津秀一郎・坂東智子「ICT環境を活用した中学校国語科の授業開発」『学部・附属教育実践研究紀要』第14号、平成二七年山口大学教育学部（五七頁～六六頁）

(2) 秋田喜代美「リテラシーの習得と談話コミュニティの形成『授業研究と学習過程』平成二二年放送大学教育振興会（一八頁～一九頁）

(3) (2)に同じ、（一九頁）

(4) 高垣マユミ「第7章 協同の学習過程の研究」『授業研究法入門』（河野義章編著）平成二一年図書文化（七八頁）

(5) (4)に同じ、（七九頁）

(6) 山口大学教育学部附属光小学校・中学校『新たな価値を創造する子どもを育てる』思考を活性化する学びのフィールド』平成二六年小中連携研究・研究紀要（三頁）

(7) (4)に同じ、（七九頁）

【附記】

本稿は、平成二七年五月第一二八回全国大学国語教育学会兵庫大会で口頭発表した内容に加筆、修正を加えたものである。大会では多くの先生方からご教示を賜った。この場を借りて、厚く御礼申し上げる。

（ばんどう・ともこ／山口大学教育学部）